

日蓮聖人の宗教は実行を主とせられ、「法華の行者」と言って居られる。
支那の天台大師や日本の伝教大師は何れかと云えば「理」を主にして居られるが、日蓮聖人は「事」を主にして居るということによって居られるのである。天台の教義の中心を成して居るものが一念三千と云うことであるが、日蓮聖人は天台大師は「理の一念三千」であるけれども、自分の世の中に弘めるのは「事の一念三千」であると言って居られる「事」の一念三千ということは天台大師の立つた一念三千の「理」を本にしてこれを実行に移して自ら之を身に行うのだという意味である。日蓮聖人の特色は、この天台大師、伝教大師が「理」として唱えたことを「事」に移して、身を以てこれを実行し、また大勢の人をして実行せしむるといふ所に在るのである。実行を離れては日蓮聖人の一生というものは全く考えられないのである。

既成仏教に対する痛烈な折伏の鞭は正直にして、方便を捨て、唯無上道を説くと云う法華経方便品の立場からいえば明らかに法は一つでなければならない、法華経以前の経は釈迦によって「四十余年末顕真実」であるといわれる。したがってこれらの経を所依とする諸宗は、真実経を招き出すべき権教であるとの確信より打ち出されたのである。

日蓮聖人の謗法を断ずる方法として一切の施与の関係を遮断する態度をもってした。

立正安国論に、「早く天下の静を思はば須く国中の謗法を断つべし」

所詮国土泰平、天下安穩は一人より万民に至るまで好むところなり、樂ふところなり、早く一闡提の施を止めて、永く僧尼の供を致し、仏悔の白波を収めて法山の緑林を截らば世は義農の世となり、国は唐虞の国となるらん。

といて国土安穩の対策ここにおいた。

また御講聞書には不受の立場として、

国王大臣より所領を給わり、官位を給うとも、それには染せられず、謗法供養を受けざるをもって不染世間法と云うなり。

さらに御義口伝に

謗法供養を受けざるはどん欲の病を除くなり。

なお日蓮は極論して、たとえ五逆の供を許すとも謗法の施を許さじと申して居るのである。

日蓮聖人のこれら一連の所説はその当初より涅槃経を原拠とした。

日蓮聖人の立教において強調せられた折伏諫曉謗法の基本的法憲が、日蓮師滅後七百年間に如何なる形式にて顕れたか、如何にして守られたかと数々の宗論宗難に依り諸先師、先輩の苦悶考察せんとして稿を進めた次第である。

(1) 日蓮宗最初の教団分裂者日興

日興は日蓮聖人の本弟子六人の内に数えられ、日蓮宗門の重鎮であって後にいわゆる六老僧の一人である。ところが日興は身延の有力なる檀越波木井実長と信仰上の問題で意見の相違を来したる為、日蓮上人の御七回忌の正応元年十二月に身延山を下山して富士の大石寺重須（おもす）に本門寺を創立して僧侶および檀信徒の教育に大いに励み、教線を拡大して鬱然たる勢力を富士地方におこしたのである。

日興と波木井実長との信仰上の問題とは如何なる事かと云うと日興より原殿の御返事に依れば、

1. 謗士守護神明無し
2. 三島神社参詣不可
3. 富士塔供養不可
4. 謗徒回向祈念不可
5. 一体仏造立不可
6. 外典僻事不可
7. 日向人格不可

の七ヶ条によって日向（六老僧の一人）ならびに波木井実長を謗法罪として日興身延を下山したのであるが、この事件に関する史料が他に見当たらないので実状不詳であるが、以上の文面にては日興の論法が正しいのではないかと思わる。

斯くして日興は身延に対して富士を開闢として最初の教団分裂者となったのである。

（2）応永の法難

日仁、日実京都で伝道にはげむかたわら、朝廷、足利将軍に諫曉（かんぎょう）して法華宗の正義を上奏しようと思ひ、応永五年の四月から六月にかけて日仁、日実など日什門下の高弟たちは上奏献白の下準備にとりかかりた彼らは将軍への献白書を懐中し、管領や諸大名奉行役所、そして公卿や豪族と交際のあつゝ歌人の邸を訪ね、諫状の趣旨である法華経の信仰に入られるよう、そしてこれを明らかにする為将軍の面前で叡山東寺をはじめ諸宗と問答することを許されるよう、将軍に取りついでもらうように申し入れました。要路の人々はこれはなかなかの大事であるからといって取り次ぎすることを断るものもあり、中にはこのごろの諸寺の僧たちは所領や、官位や名利のことばかりに汲々とし訴訟しているのにいま程、「仏法についての訴訟珍しく殊勝の事に候、上様へも御申し候えば、そのとき心得申すべく候」とほめる人もあつたりして、これが間もなく洛中に聞こえて大評判になった。

ところが法華宗の寺々では日仁たちの動きについて、あるいは諸山がこのために迷惑をうけるのではなからうか、折角このように隆盛になっているわが山の前途をあやうくするのではないかと恐れ、内々に妨害しようと考えだしてきたのです。日仁はこの気配を早くも察知しこは一刻も猶予してはならない早く将軍に諫曉直訴せねばならぬと決心し、庭中の準備をととのえました。庭中といひますと室町時代では将軍に直訴することを意味し、これは禁じられていましたが、また庭中奉行に訴える方法もありまして、日仁は庭中方を通じ内々手引きによって将軍に直訴しようとしたわけである。そこで門下僧俗が会合し、先師日什の高弟日仁、日実を直訴の長とし同じく高弟日運が留守を守って第二陣にひかえ、供には同じく高弟の日行、それに日什も庭中を行ったことがあり、そのとき供をつとめた右衛門二郎光次、右衛門二郎国安、右衛門九郎友重、それに童子の四郎以上七人を選んだのである。この日、日仁、日実の出立の様子は白ねりの大口袴、重衣張衣の袈裟という服装であった。

さて日仁等は好意を持つ侍たちの手引きによって無事御所の中に入ることができ、将軍に諫曉の献白書を奉り、諸宗の邪義を捨てて法華経の正法を信じ、国土の安穩を計られたまえと声もすずやかに滔々と述べたのである。将軍義持はこれを聞き直訴の禁を犯すの

みならず、いらざる諫言だて不屈きな所行であると怒り、「無礼なる法師ばらかな、彼等法華宗は念仏を唱うるを最も嫌うと聞く、彼等に念仏を申させよ、もし申さぬならば拷問しても唱えさせよ」と命じました。日仁らが念仏を申すことなどもちろん承知すべくもない。二人はたちまち打ち伏せられ、縄をかけられたが右手の中指を打ちくだかれ頭に沸きかえる茶の湯をかけられて、皮はただれて剥げるばかりに責めたてられたのである。日仁はこれに屈せず大声をはりあげて南無妙法蓮華経と唱え、「この責苦に耐える功德によってわれらは必ず靈山浄土へ至るであろう」といいましたから、義持は「ええいつ、こしやくな世迷い言、もっと強く責めよ」と杵をもって左の足をはさみ微塵になればと責めさせました。日仁なおも屈せず「ただ今無始以来の修羅道の苦患を果たしてただちに寂光の本土に至るべきよろこばしさよ」と叫びましたから今度は五、六個の水さしを並べて日仁の口に流し入れ、すき間もなく繰り返しかえしせめたてたのである。

一方日実には侍たちは冷酷な口調で湯問（ゆとい）にしようか、水問（みずとい）にしようか、お前の好きな方にするがどちらがよいかとおどした。

日実「湯問、水問は普通の罪人にするのであろう、太刀でもって頸の真中を通してみたらいか、頭を斬ればあとが見苦しかろう、からだにきずのつかぬよう頸の真中を通す太刀問こそ願うところである。命は果つとも念仏は申さぬ」といい切ったので、武士たちはそれでは望みに従って太刀問にしてやろうと太刀を目の前に振りおろし、はね返しひらめかせ、はては頭と太刀の間に扇子をひろげおき、太刀の刃を下にして刀背（みね）の上に日仁の両手をしばって重しにおき、ゆるゆると鋸のようにひきはじめます。扇の紙は切れ、さかれ、刀の刃は皮を切り肉をさいて鮮血は淋りとして流れ、面を赤く染めていったのである。

こうしてうちつづく拷問に息もたえだえにあえぎながらも両人はいよいよ南無妙法蓮華経と唱えてやめませんでしたから武人たちはかえって責めあぐみ、また心底憎んでやっていることでもなかったの、彼らはささやいて「上には彼らは念仏を申したと披露してやめようではないか」と相談しあいました。日仁かすかにこれを聞き「何をいうか、かりそめにも念仏を申したと披露して我らが生命を助かろうと思うのか」と渾身の力を奮って叫んだので武士たちは、「なんということをまてまて」とあわてて日仁の口をふさぎました。日行、光次らはやがてまわってくる自分たちの番をまって冷然と拷問を見まもっているのである。さすがの將軍もあまりのことにあきれて南御所の方に走りさり、尼君女房たちはその無惨なさまをみて嘆き悲しみ、並み居る管領や奉行人侍たちは拷問をうけているものはもちろん、これを顔いろも変えないで泰然としている日行、光次らを見、「僧はともかく俗人共の心振る舞い至っての馬鹿か、至っての道心者か世にも越えた豪の者たちよ」とほめあったのでした。やがて間もなく御所より使者が走って来て、拷問がすめば許せとの命令を伝えたのである。

拷問の武士どもはじめ数千の侍たちやっとう安堵の思いをし、拷問した人々は走りよって二人の縄をとき、あるものは人参をきざんで水薬を作り飲ませ、団扇であおぎながら、「今日ほど奉公をつらく悲しいものに思ったことはない、心ならずも罪を作ったことをゆるされよ」と口々にいい、足腰の立たなくなった日仁、日実を両方から肩にかけ、門の外に送って行ったのである。この時日行たち三人は悠々うそぶき笑って出てきましたから侍たち「ああ、ここにも曲者（くせもの）がいるわい」とあきれた風情で笑って送り出した。

門前には日仁らの身を案じた信者たちが待ちうけていましたから、この人々にたすけももられて帰りましたが、このことはたちまち洛中の隅々までひびきわたって法華宗の宗風はいよいよあがりはじめ、日仁らの諫暁を快からず思った諸寺も自らの誤りをさとって、諫暁を競い行い、日什門下の精彩を加えるようになった。日実たちはそののち応永七年関白一条経嗣に奏し鎌倉に下って管領氏満に同十年には立正安国に申し状をそえて後小松天皇に奏上し、その後も再三にわたって公家に諫暁して宗風をいやが上にも顕揚したのである。

(3) 永享年鑑の法難

日蓮宗と天台宗の宗論

当時の法華信仰の生粋さをあらわすものとして有名なる法難がある。事の起こりは日蓮宗一乗坊日出師（三島本覚寺住職）及び大進律師日妙（金剛宝戒寺住職、久遠成院日親の弟子）が天台宗心海（北条一族全滅の寺として有名なる天台宗金剛宝戒寺の心海なり）と鎌倉において宗論問答をおこなった心海、背後には諸宗ならびに足利持氏管領があった。足利持氏は常日頃からの日蓮教団の国家諫暁強義直練を不快におもっていたところへ問答で心海が一敗したので怨嫉を激発して鎌倉中日蓮教団を撃滅せんとして辻々に制札をたてた。それは

日蓮義一切禁制之事

「比企谷妙本寺小町妙隆寺浜の法華寺等、鎌倉中の法華堂惣じて十六ヶ所悉く破却たるべし。もしこの旨に違背するに於いては侍は所領を召し地下は頸を切り、法師は遠島に流すべし」

という弾圧暴令であった。時正に聖滅一五五年永享八年であった。

然るにこの制札を見た宗徒の面々は僧となく俗人となく、老若男女を問わず続々と役所に馳せ参じ我れこそは日蓮義の信者なり、いざ流せ、いざ斬れ、吾は法華経のみりと共に命ある身ぞと名乗り出でたる者六十余名とは、日親「伝灯抄」にありこの人数真ならん、一人でも頸を斬った最後、幾百人の頸を切らねばならず、如何なるはずみで天下惑乱のきっかけとなるやも計り難く、とうとう管領持氏は時の動きを見て禁令を撤回したのである。まことに痛でもあり遺憾なく「法華経魂」を表現した小波乱であった。なお持氏はこの事件で結縁され、後に日出師の心海との問答自記を見て感悟帰伏するに至り、夷堂橋畔の地を日出師に寄進して本覚寺の基をひいたのである。

折伏下種逆即是順妙化を現身に末示するに至りました。

日親万部読誦供養

足利持氏が応永二十年の兵乱（上杉憲実の弟持仲を奉じて鎌倉に持氏を攻む。持氏將軍義教の援によりて鎌倉を役す）のこの兵乱の為使者追善の第二十五回忌に当たる永享九年に供養をする事になり、持氏は万部読誦を各宗に割りあて、法華宗鎌倉諸寺に対し一千部読誦する要請があった。然しながらこれは各宗の読誦部数の目録を提出してこれを一括して天台宗の心海が各宗何部という事を読み上げるのである。ところが法華宗にとっては同座の謗法（謗法者と同座する事）に当たる故を以て、たとえ読誦はしても目録上呈は嚴重にこれを拒絶したのである。日親は万部読誦したるも勿論目録上呈は拒絶したのは申すに及

ばず、

然るに塔の辻妙法寺のみ部数目録を上呈したので心海は観音堂において供養の時「法華宗三百部」と読みあげたので心海は「及聞程ノ諸門徒不悲歎」者はなかったというのである。このことを日親は、「天台宗の心海に供養せさせん事は口惜かるべし」と云っている。だがこの時は妙法寺以外の日蓮宗諸寺の部数目録上呈の拒絶については、別に行政上の問題ともならず終わったようである。

日親の法難

しばしば將軍足利義教に強義直諫したるも義教は真言宗出身でいたく日親の折伏逆化をにくみ居りたる処、永享十一年御歳三十三歳の御時に「正法治国論」を義教に献上したるかどに依り逮捕せられ禁獄拷問せられたのである。その拷問たるや惨刑言語に絶す。

1. 四疊高さ四尺五寸、天上下にむけ八寸の釘を打ちその内に三十六人を入れる。日親ここに一年有半
2. 炎天真夏に日親の四圍に薪を山積して焼く
3. 極寒梅樹に裸にしばり通夜水をそそぎ杖打す
4. 浴室に蒸す六時間
5. 倒立せしめて杓子にて水を吞ましむ、三十六杯までは記憶
6. 竹串を陰莖に貫く
7. 焼くわを両脇にはさむ
8. かくてついに鍋冠に至る

日親德行記「埴谷抄」による

斯くの如き惨刑また惨刑、いかに拷問するも日親は安祥として「難来ルヲ以テ安樂行トス」の聖訓を色読してびくともしないので、遂に焼鍋を日親の頭に被せた。それでも日親は神色自若として題目を唱えつつなお義教の謗法を苛責したのである。義教は嘲笑って「法華経の行者を迫害すれば現罰があるというが、汝を禁獄すること一年有余年、水火の責苦をあたえたるも謗法者の我が斯くの如く安樂で、法華経の行者たる汝が禁獄惨刑極苦にあうは如何に」と、うそぶいた。

日親「哀れなるかな、將軍の言葉、われ將軍の改海して正法に帰依するを願う故に、諸天善神に申し請うて現罰を止め居るも將軍いよいよその非を改めぬ時は、三年の内に必ず現罰あるべし」と答えた。義教は「日親の言何ぞ、しかし緩慢なること人生留難多し、三年の後に災難にあうとも何ぞ日親を悩ませし罪と知らん」と、からからと打ちわらった。

日親「ああ」と長歎息して「將軍いささかの改海の心なく三年を以ておそしとせば、日蓮大菩薩も百日一年、三年、七年の中に「自界叛逆難」ありと仰せあれば、三年を百日に縮めん、その期に及んで日親をよびたもうも既におそし、願わくば君今において日親が諫を用いたまえ」と答えた。勿論義教はこれを日親の虚喝と考えて且は瞋り、かつは嗤いて意にとめなかった。然るにこれより九十九日目にあたる嘉吉元年六月二十四日六代將軍足利義教は赤松満祐のために暗殺されたのである。

千僧供養

永享十二年足利義教、義満（鹿花院）の第三十三回忌供養に際して日蓮宗も招請を受けた

がこの供養に望みたるは妙本寺を首として八ヶ寺のみにて自余の五十ヶ寺は身軽し、法重し一致団結不惜身命にて諫暁した為に足利義教これを了とせられ、宗門には毀がつかず終わったのである。

日親聖人の略歴

応永十四年に誕生、幼名寅菊麿、父母の名は不明なれども、氏は平民と伝えらる。幼少にして上総埴谷妙宣寺三世の叔父に当たる日英の弟子となり、日英没後下総中山に行きて日暹の弟子となり始めて日親と名乗る。応永三十三年、三十四年に渡り荒行、即ち寒中百日の寒行、または十日間に手の指十指の爪を抜き、十指に悉く鍼を通し更にその手を熱湯の中に入れる等、忍力の修行等なし応永三十四年京都に出て、京都一条戻橋に傘を立つて路傍布施、日親は日像に続いて日蓮宗の京都布施の功勞であつて強烈な謗法否定論者で不受不施法制を厳しく守り、折伏布施諫暁も度々事ある毎にその筋に行いたのである。

京都布教の間を見ては山陽、山陰、遠く九州路までも出かけ布教に余念なく、京都本法寺外三十三ヶ寺を創設し、他宗と問答すること六十余度、従つて迫害災難教知れずといわれている。

著書も多し。長享二年九月十七日八十二歳を以て京都本法寺に於いて入寂。

(4) 強烈なる不受不施論者日朝聖人

日朝は寛正二年身延山入山、明応九年六月二十五日入寂、在職四年の身延十一世貫主である。日蓮聖人の再来とうたわれた人で、聞謗法言正可洗耳不知受謗法可研齒と強烈に謗法を否定している。後の不受不施の第一祖である日奥によって讃歎されて居、言葉に日朝は智徳高く行高甚だすぐれたり、後学誰か此等の明哲を欺かんや。

また身延貫主であつた日唱は絶大なる日朝崇拜者であつた為に、後日の不受不施事件に於いて身延山から除歴せられたる事を以ても、如何に日朝が定評ある不受不施論者であり、且つ後世の不受不施運動を鞭撻することいかに大であつたかを知ることができるのである。

(5) 天文法難

日蓮宗と京都

日朗聖人の京都地方の日蓮宗布教指示を受けた日像の帝都開教二十年連日街頭に布教したのである。北野天神社頭に獅子吼せしを近衛経忠の子日光丸（大覚寺妙美）これを聞いて帰伏し、妙美の援護により教勢大に上がり遂に目的を達せられる事が出来た。（妙美は後の大覚大僧正）斯くして明応三年当時全京洛都民はその大部分が法華經の信徒となつて寺院数は約六十寺、この中末寺を有する本山格が二十一ヶ寺に及び隆盛となつたのである。然しながら日本全仏教の総本山格で、且つまた皇室や幕府との数百年におよぶ歴史的因縁に結ばれた一大勢力は何といつても比叡山であつた。特に京洛の地においては比叡山のお膝元である関係上、その勢力は軽視できなかつた。

ところが新興勢力として日蓮教団は聖滅二五〇年ごろ京洛上下を風靡して、貴紳公武の入信帰伏者はもとより日蓮宗への出家者もあり、僧位僧官の任官昇進もめざましく、帝室の尊信を一手に引き受けていた比叡山の怨嫉はついに日蓮宗に集中せられる結果になつた。

山徒の日蓮宗迫害の第一矢は嘉慶元年頼願寺たる妙顕寺の破却に始まった。この寺の住職日齋は難を福井県の小浜にさけたが、六年後將軍の足利義満より三条坊門堀川の地を受けたが、比叡山の山徒は妙顕寺再興を許さない。そこで朗門の本寺を移すとて妙本寺を改称して再建した。然るに山徒は日蓮の徒が、「法華宗」と称するは叡山の宗号を盗用するものと強訴してきたので、日齋は後醍醐天皇の論旨を宗号公許の証として破折した。しかしながら山徒は応永二十一年ふたたび妙本寺を破却した。要するに日蓮宗寺院で皇室と関係が深ければ深いほどそれが怨嫉の種である、妙本寺は法華宗の開祖である。

当時の妙顕寺（妙本寺）は本国寺とならぶ日蓮宗の二大寺院の一つで、すくなくとも百数十人の僧衆がいたのである。これが破却せられたのが契機となりかえって日蓮教徒の団結をうながし、いよいよ宗勢は発展し、教線は拡大せられた。

永正元年叡山座主円信宗義を難ずるや日憲これに応じて論戦し、鎌倉の日澄「日出台隠記」を著して円信を論破した。

大永四年山徒は洛内の日蓮宗教徒の住宅を破却し、翌年本能寺をも焼くに至る。